

本屋を訪ねて三千里

一度手に取ってから買いたい！

本屋訪問記の執筆をきっかけに本屋にはまり、
年間で百店以上訪れる「本屋応援団」の小寺律さん。

「本屋さんを盛り上げる一助になれば！」と
本屋巡りの楽しみ方を語ってくれた。

本屋愛好家

小寺 律

●こでら・りつ 1964年東京都生まれ。東京大学文学部を卒業後、印刷会社に勤務。文藝春秋が運営する「CREA WEB」と「本の話WEB」で昨年8月まで本屋訪問記「週末の旅は本屋さん」を連載。

目で見て、手で触って

——本屋巡りを始めたきっかけは？
もともと本屋は好きで、よく行っていました。仕事の関係で本屋さんを応援しようという趣旨のブログやツイッターをやっている、そこで記事も書いていましたし、投票権はないのですが、本屋大賞の賛助会員と

して、毎年、発表会に行ったりする中で、書店員さんと知り合って話を聞くことが増えていきました。

あちこちで「本屋が好きだ」と言っていたら、三年ほど前に文藝春秋の編集者から「コラムを書いてみない？」という声がかかり、「週末の旅は本屋さん」という本屋さんを紹介する連載をやらせていただきました。その連載は昨年終わりましたが、

意識しているいろいろな本屋さんを見て回るとは、七、八年ぐらい前から続けています。

——読書自体がお好きなのですか？
中学、高校のころからわりと読んでいたほうだと思います。一番読んだのは中学二年の夏休みです。毎日図書館で五冊借りていたので、夏休みだけで二百冊ぐらい読みました。
いまは読み直しも含めて、月に二

十冊程度でしょうか。通勤は天気がいいと自転車、雨の日は電車なので、約三分の通勤電車に乗っているときに往復で文庫本を一冊読む、晴耕雨読のような感じですよ。

最近では、本屋大賞でノミネートされた十作品は毎年必ず読むようにしていますし、俳句が好きなので『歳時記』があるついで買ってしまいます。余談ですが、『望星』にも登場している長谷川権さんと一緒に句会に参加していたこともあるんですよ。
この人の作品は必ず読むという作家さんも何人かいますが、それだけでなく自分の読書の枠が広がりません。こんな作家がデビューしたとか、いままであまり注目されていなかったけれどこういう人がいますよ、と薦められて読むと、ときにはハズレもあります。面白い作品に出会えることもあります。いまは一般的に、

ハズレを恐れるがあまり、読書に対して保守的になっていく人が多いような気がします。

——インターネットであらかじめ決まった本を買うことも、そういう傾向に拍車をかけていますね。

そうですね。テレビで芸人さんが「この本が面白い」と言うと、アマゾンのランキングがポーンと上がって、すぐに品切れになってしまうことがあります。たまたまそこで紹介されただけであって、面白い本はほかにもたくさんありますし、できるだけ自分で見つけて、いろいろな本を読みたいと思っています。

いまの時代、本はネットでも買えますが、私はそれがダメなんです。見た目のデザインだけではどうもピンときません。持ち重りや質感を含め、一度、手に取ってから決めたい。それに偶然みたいなのも意外に大

切で、自分が読んだ本や好きな本の隣にある本を読んでみようと思うことも少なくありません。

私の本屋巡りも同じようなことが言えるんです。自分の行きつけとか、好きな本屋さんにしか行かないと、読書体験がどうしても自分の枠から出なくなってしまう。店内に入ってみて、ここはあまり好みではないなという本屋さんでも、そこではこういう本が推されているんだなと知ることができますし、いままで読んでなかったけれど、面白そうだなという本との出会いがあるわけですよ。

変な本が好き

——どのような本を面白いと感じるのでしょうか？

私は「ジャケ買い派」なんです